

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 4 日現在

機関番号：34527

研究種目：若手研究(B)

研究期間：H22～H24

課題番号：22730571

研究課題名（和文） うつ病におけるセルフスティグマと否定的自己認知に関する研究

研究課題名（英文） Research on the self-stigma and negative self-cognition in depression

研究代表者

下津 咲絵 (SHIMOTSU SAKIE)

神戸山手大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：90392448

研究成果の概要（和文）：本研究では、うつ症状における認知の偏りとセルフスティグマの関連について検討することを目的とした。研究1では、米国において開発された Depression Self-Stigma 尺度の日本語版の有用性を確認した。研究2では、認知の偏りとセルフスティグマ、およびうつ症状と自尊感情の関連について共分散構造分析を用いて検討した。その結果、認知の偏りと自尊感情の間に、うつ症状とセルフスティグマが媒介するモデルの適合度が良好となった。

研究成果の概要（英文）：

The present study aims to examine the relationship between cognitive bias and self-stigma in outpatients whose chief symptoms are depression. In study 1 described the development and evaluation of the Japanese version of Depression Self Stigma Scale (DSSS). And the results of structural equation modeling analysis suggested that self-stigma mediated the relationship between cognitive bias and self-esteem, in study 2.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1200,000	360,000	1560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2300,000	690,000	2990,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：社会系心理学、社会精神医学、臨床心理学

1. 研究開始当初の背景

精神疾患回復過程におけるセルフスティグマの悪影響について実証的な研究が積み重ねられている。例えば、社会適応の阻害 (Perlick ら, 2001)、治療行動不遵守 (Sirey ら, 2001; 下津, 2007; Gaebel ら, 2006)、自

尊感情とセルフエフィカシーの低下 (Corrigan, 2002; Link ら, 2001)、高いうつ症状との関連 (Yen ら, 2006; Pyne ら, 2004)などである。

また近年では、セルフスティグマの低減手法に関する検討がなされている。そのなかで

は、特に認知の偏りとセルフスティグマとの関連が指摘されている。例えば、うつ症状を呈する者の特徴である否定的な自己認知と、セルフスティグマの高い者がもつ自己認知との共通性が指摘されている<例：「精神病になった私はダメな人間だ」>(Corrigan ら, 2009; Watson ら, 2007)。また、うつ病患者におけるセルフスティグマの重要性に注目した、うつ病に特化したセルフスティグマ尺度(Depression Self-Stigma Scale)が開発されている(Kanter ら, 2008)。このように、うつ症状の否定的自己認知とセルフスティグマの関連という近年の諸外国における先行研究の示唆により、以下の目的での研究について着想に至った。

2. 研究の目的

(1) 研究 1

日本語版 Depression Self-Stigma 尺度の開発：Kanter ら(2008)によって開発された、Depression Self-Stigma 尺度の日本語版を作成し、うつにおけるセルフスティグマの特徴、および日本における特徴について検討する。

(2) 研究 2

うつ症状を呈した患者におけるセルフスティグマと認知の偏りに関する検討：うつ症状と自尊感情に対するセルフスティグマの影響を検討し、さらに、認知の偏りがそれら 3 つの変数とどのように関連するかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 研究 1

調査対象：関東、関西、九州地区の 3 大学に在籍する大学生 377 名。回答に不備のあった者を除く 371 名を分析対象とした。男性 149 名、女性 222 名。平均年齢 20.37(SD=1.46)歳。

実施尺度：①うつに対するセルフスティグマ尺度(Depression Self Stigma Scale: DSSS):32 項目、7 段階評定。日本語版作成にあたっては、開発者より許諾を得、日本語に翻訳の後にバックトランスレーション作業を行った。その上で項目内容に原版と相違がないことを開発者と確認した。②CES-D 抑うつ状態自己評価尺度：20 項目、4 段階評定。③Link スティグマ尺度(Link, 1987; 下津ら, 2006): 12 項目、4 段階評定。

(2) 研究 2

調査対象：2 か所の研究協力施設(精神科病院)に通院中の患者を対象とした。そのうち、うつ症状を呈していると主治医が判断

した者のうち、研究に関して説明し、文書での同意が得られた者を調査対象とした。分析を行った 110 名(男性 54 名、女性 56 名)の平均年齢は、45.65(SD=12.68)歳であった。ICD-10 による主診断は、気分障害 83 名、不安障害 17 名、適応障害 5 名、その他 5 名であった。

調査尺度：①DAS-24-J 日本語版(Tajima ら, 2007)、②Link スティグマ尺度(Link, 1987; 下津ら, 2006)、③CES-D 抑うつ状態自己評価尺度(Radloff, 1977)、④自尊心感情尺度(山本・松井・山成, 1982)を実施した。

4. 研究成果

(1) 研究 1

①原著版との得点比較

DSSS の先行研究(Kanter ら, 2008)における全体平均値は 117.33(SD=35.45)点であり、本研究では 109.89(SD=32.00)点であった。CES-D の先行研究における平均値は 25.43(SD=9.41)点であり、本研究では 23.02(SD=12.44)点であった。

②因子構造の検討

原著版と同じ、5 因子構造をモデルとした確認的因子分析(重みづけのない最小二乗法)を行った。

第 1 因子は General Self-Stigma(全般性)、第 2 因子は Secrecy(秘密性)、第 3 因子は Public Stigma(社会的)、第 4 因子は Treatment Stigma(治療)、第 5 因子は Stigmatizing Experiences(経験)であった。

5 因子構造での分析の結果、適合度指標は、GFI=0.965、AGFI=0.959、NFI=0.956 であった(図 1)。

③信頼性・妥当性の検討

各因子の α 係数は、第 1 因子が $\alpha = 0.90$ 、第 2 因子が $\alpha = 0.83$ 、第 3 因子が $\alpha = 0.83$ 、第 4 因子が $\alpha = 0.73$ 、第 5 因子が $\alpha = 0.88$ であった。

並存的妥当性の検討として、Link スティグマ尺度との相関を検討した結果、0.16~0.45 の正の相関が示された(表 1)。

考察：DSSS 日本語版開発にあたり、因子構造の検討と信頼性・妥当性の検討の一部をおこなった。その結果、原著版と同様の因子構造が日本語版でも有用である可能性が示され、尺度の一定の信頼性と妥当性が確認された。今後、さらに対象者数を増やし、DSSS 日本語版の有用性について検討していくことが課題である。

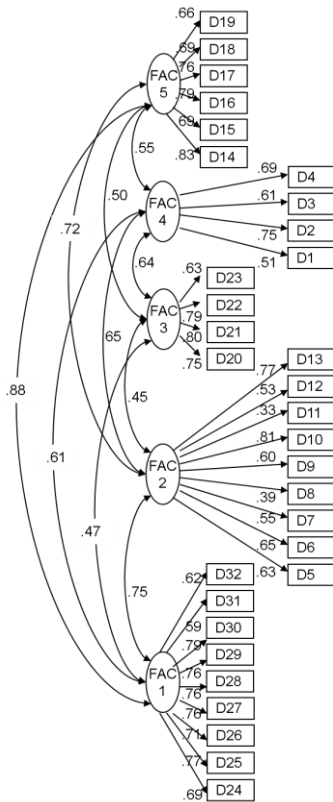


図1 DSSSの確認的因子分析

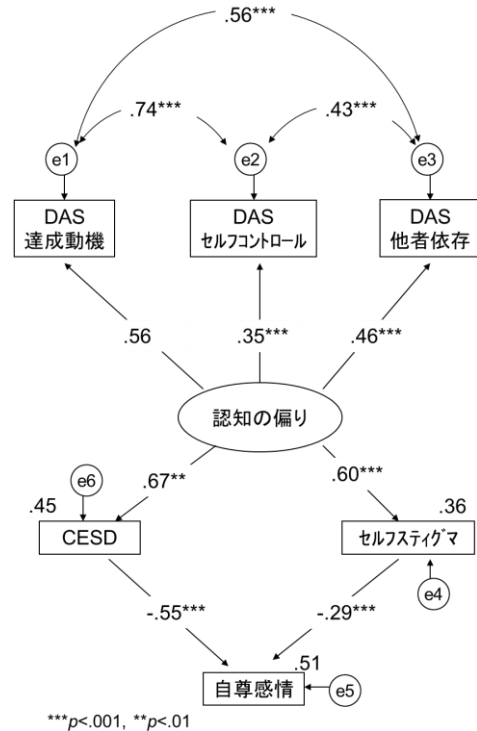
表1 DSSSとLinkスティグマ尺度の相関

	Link スティグマ
DSSS合計	0.41 **
FAC 1	0.34 **
FAC 2	0.37 **
FAC 3	0.21 *
FAC 4	0.16
FAC 5	0.45 **

** $p < 0.01$; * $p < 0.05$

(2) 研究2

認知の偏りとうつ症状や自尊感情に、セルフスティグマがどのように関連しているかを検討するために、共分散構造分析を行った。その結果、図2に示すような認知の偏りと自尊感情の間に、うつ症状とセルフスティグマが媒介するモデルの適合度が良好となった (GFI=0.98, AGFI=0.91, CFI=0.99, RMSEA=0.07)。



*** $p < .001$, ** $p < .01$

図2 認知の偏りがうつ症状とセルフスティグマを介して自尊感情に与える影響に関するパスダイアグラム

考察: 認知の偏りとセルフスティグマとの関連は先行研究の報告と一致していた。モデルを用いて検討した本研究の結果からは、認知行動療法を用いて認知の修正がなされ、うつ症状に改善がみられることにより、自尊感情が回復するという道筋に加えて、セルフスティグマの低減により自尊感情が回復するという影響を加味する必要があることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 下津咲絵・長尾文子・江村理奈・尾形明子・石川信一・比江島誠人・細見潤、地域クリニックにおける集団認知行動療法の実践の試み、認知療法研究、査読有、第4巻1号、76-85頁、2011.
- ② 下津咲絵・江村理奈・尾形明子・長尾文子・石川信一・比江島誠人・細見潤、集団認知行動療法実施によるセルフスティグマの低減効果、精神科治療学、査読有、第25巻、第9号、1241-1248頁、2010.
- ③ 下津咲絵・坂本真士、精神障害に対する態度、偏見、Linkスティグマ尺度、臨床精神医学、査読無、第39巻増刊号、114-120頁、2010.

〔学会発表〕(計3件)

- ① 下津咲絵・坂本真士・佐藤 寛・亀山晶子、抑うつセルフスティグマ尺度(DSSS)日本語版作成の試み、日本心理学会第75回大会発表論文集、p321、2011.
- ② 長尾文子・押川栄利子・下津咲絵、自責的思考パターンが慢性化したうつ病患者への認知行動的介入、日本行動療法学会大会発表論文集 37(suppl)、p476-477、2011.
- ③ Shimotsu S, Emura R, Ogata A, Nagao A, Ishikawa S, Hiejima S, Hosomi J, Effect of group cognitive behavior therapy on Self-Stigma, The 6th World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, Abstracts, p113, Boston, 2010.

〔図書〕(計2件)

- ① 60のケースから学ぶ認知行動療法、坂野雄二監修、p. 355-p. 359『精神病に対するスティグマ』下津咲絵担当、北大路書房、2012.
- ② 自尊心を育てるワークブック、グレン R シラルディ著・高山巖監訳、p89-p112 第7章-10章 下津咲絵担当、金剛出版、2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下津 咲絵 (SHIMOTSU SAKIE)
神戸山手大学現代社会学部・准教授
研究者番号：90392448